

特 240
449

聖和堂什物舖第一號
信仰 道德 恩惠



— 1934 —



始



特

449

神學博士 稻垣陽一郎著
信仰、道德、恩寵



第一輯

—1934—

特240
449

<p>篤き信仰と 惜みなき寄捐とによりて 神の榮光の爲に 財團法人白石庵敬神會を設立せられし 今泉民吉氏に 本叢書第一輯をさゝぐ</p>	<p style="text-align: center;">白石庵敬神叢書</p> <p>一、本叢書は財團法人白石庵敬神會の助成金によりて發行せらる。</p> <p>二、本叢書は我國に於ける基督教に關する智識増進の爲めに幾分にも貢獻せんことを目的とす。</p> <p>三、本叢書は一年三回發行す。</p> <p>四、本叢書は稻垣陽一郎監修の下に發行す。</p> <p>五、本叢書は</p> <p>(一) 聖公會の教義に關するもの (二) 敬神修行に關するもの (三) 傳道に關するもの (四) 基督教藝文に關するもの 等を載す。</p>
--	---

信仰、道德、恩寵

愚なる者は心の中に神なしと云へり
彼らにこそされたり、憎むべきことをなせり、善を行ふものなし (詩篇第十四篇一節)

此イスラヘルの聖詩人の歌ふ所は、よく神への信仰と、人間の道德と、密接なる關係のあることを道破したものである。人は元來、其信するが如く行動するものであるからである。其信する所、正しくば、正しく行動し、其信する所、過らば、其行動も從て過る。此世界に唯一の眞神の存在することを信すると、信せざるとは、其人の日日の行動、延て其人の一生涯と密接なる關係あるのみならず、社會一般の道德にも影響を及すこととなる。
然らば基督教の信仰と道德と其實踐は如何。

一、基督教信仰

「信仰」(The Faith) と「信念」若くは「信心」(Belief) とはさのづから異なる。
「信念」「信心」とは、單に「宗教心」を意味す。これは人間特有のものである。これは人間が自己

特240
449

其の信仰と
惜みなき奮闘とによりて
神の榮光の爲に
財団法人白石庵敬神會を設立せられし
今泉氏吉氏に
本報を第一號とすべし

白石庵敬神會

- 一、本報者は財団法人白石庵敬神會の助成金によりて發行せらる。
- 二、本報者は我國に於ける基督教に關する管理階級の爲めに盡分にても貢獻せんことを目的とす。
- 三、本報者は一年三回發行す。
- 四、本報者は朝日新聞一應受領の下に發行す。
- 五、本報者は
 - (一) 聖公會の教義に關するもの
 - (二) 敬神修行に關するもの
 - (三) 聖徳に關するもの
 - (四) 基督教文に關するもの

信仰、道徳、恩寵

愚なる者は心の中に神なしと云へり
彼らにはくされたり、憎むべきことをなせり、善を行ふものなし (詩篇第十四篇一節)

此イヌラヘルの聖詩人の歌ふ所は、よく神への信仰と、人間の道徳と、密接なる關係のあることを道破したものである。人は元來、其信するが如く行動するものであるからである。其信する所、正しくば、正しく行動し、其信する所、過らば、其行動も從て過る。此世界に唯一の眞神の存在することを信すると、信せざるとは、其人の日日の行動、延て其人の一生涯と密接なる關係あるのみならず、社會一般の道徳にも影響を及すこととなる。
然らば基督教の信仰と道徳と其實踐は如何。

一、基督教信仰

「信仰」(The Faith) と「信念」若くは「信心」(Belief) とはものをうから異なる。
「信念」「信心」とは、單に「宗教心」を意味す。これは人間特有のものである。これは人間が自己



の頼りなさを知りて、自己以上の或者に頼らんとする心持——氣持をいふ。時としては、之は日月山川を拜することによりて現はされ、或は禁厭、護符等によりてもあらはさる。従て迷信となり、忘信ともなる。されど迷信にもせよ、妄信にもせよ、信は信である。信念——信心である。

「信仰」とは一定の「信條」「信仰箇條」「信仰綱目」を意味す。即ち一系統——一定形を爲せる特殊の宗教信念である。基督教「信仰」とは、基督教の教ゆる特殊の信條——信仰綱目である。

(註)「信仰とは恒久の妥當性を有する教の真理の一定の叙列である」(エフ、ゼ、ホール博士)

基督教の信仰の根據は勿論、神への信仰である。これは根本的である。此點は充分徹底せしめて置かねばならぬ。此信仰の有無は、あらゆる點に影響を及して来る。さりながら神への信仰は容易に似て決て容易でない。これには相當なる理解と確信とを必要とする。

(註)第七回ラムベス會議(Lambeth Conference)の「回書」並「報告」中、「神の教義」の項目参照。

「神」とは何か。

「天地の造主、全能の父なる神を信ず」とは、基督教信仰の「いろは」の「シ」である。

(註)然るに不幸にして、この神への信仰をあらはす爲に、日本在來の「神」なる字が用ひられて居る。これは屢々誤解の種となる。日本にては「神」とは「カミ」「上」の意、「帝王、聖賢、英雄等の死後の魂を祀れるもの」(言海)である。基督教にて意味する「神」は全然之と異て居る。従て初より他の文字を用ふれば

よかつたかも知れない。昔は「デウス」と稱せしことあり、今も「天主」と稱するものもある。

神は唯一にしています。「神の外に神なし」。神は絶對無二の存在である。二つ以上ありとせば、優劣前後の區別あるべく、従て各神の對立も生ず。然るに實際、此世界には統一あり、秩序あり、四季の循環、天體の運行等、整正せるを見れば、世界の統治者は唯一なることが知れる。

神は靈にしています。「神は靈なり」。従て無形無體である。故に目に見えない。

神は在さざる所はない。靈にしています。場所に制限せられたまふことはない。或所に臨在したまふ所が故に、他の所に不在となりたまふといふが如きことはない。

神は全能にしています。能はざる所はない。萬物の竟極の原因は神にあり。神は萬物の造主にいます。「神は萬物の上に在し、萬物を貫き、萬物のうちに在す」(エペソ四ノ六)世界は自動的でない。自存的でもない。神により造られ、神によりて維持せられ、神によりて統治せられて居る。「見ゆる物の顯はるる物より成らざることを知る」(ヘブル十一ノ三)。

神は又全智にしています。神は知りたまはざることとははない。其智はあられて宇宙の美、宇宙の秩序、宇宙の法則となる。

かく基督教信仰によれば、神とは唯一にして、靈なる全智、全能、遍在の活ける永遠の實在である。

(註)然るに時としては、基督教の神への信仰は近世科学と衝突するかの如く考ふるものがある。以ての外は誤解である。科学—自然科学とは何か。宇宙の現象と事實を記載し、其發達、運動、變遷の跡を指示せんとするは其本領である。然らば、自然科学の智識が進めば進むほど宇宙に關する智識を新にし、深くし、多くすることとなる。進化論の如きも其一例である。初め進化論の唱へられしときは、これを以て基督教信仰の敵たるかの如くに扱つた。然るに神を信ずる信仰のあるものよりみれば、之は生物發達の過程が明にせられ、一層神の智と力の驚くべきものあるを示すこととなつた。

然るに科学は萬物の究極の原因を説明しない。科学の智識は、世界にあらはれし物體の原始狀態まで遡る。されど其以上に出でない。宇宙の原因は科学の検討の範圍に入らないからである。科学は「如何に」を説明す。世界に如何にして成りしかを説明す。されど「何故に」——何故に世界は成りしか、其理由——其原因を説明しない。「何故に」は信仰の境域である。世に見る多くの科學者は基督教信仰を有たないが故に、世界を唯物的のみ解釋せんとする。宇宙の究極原因は置かずに神なる以上、それは不可能である。若し科學者にして、基督教信仰を懐くならば、宇宙の歴史の「如何に」と「何故に」とを兩つながら知ることとなる。眞に神を信ずるものにして、初めて世界を解釋し得る。基督教は自然科学の提供する新智識を歡迎する。之を排しない。之を恐れない。基督教信仰と科学と衝突することとはあり得ない若しありとせば、それは恐らく其科學者の先入的世界觀が、基督教信仰と衝突するのであらう。

(4)

此神には三の特質がある。

(一)神は人格を備へたまふとのことである。

神は人格的にていますとのことは、「精力」「力」でなく意志も、理性も、情も有ちたまふとのこと

ある。即ち生きていますし、「主」「なんぢ」と呼びかけて、祈ることのできる神にいます。基督教祈禱とは獨言でない。意志あり、理性あり、情ある活ける「絶對人格」との對話である。人間は親子、夫妻、兄弟、友人と相語る。語るもの同志が人格的であるからである。即ち人格と人格との交である。人格を備へて居ることは人間の特徴である。之は他の生物には見ない。これはやがて人間は「萬物の靈長」たる所以である。畢竟、これは人間は「神の像の如く」につくられてあるからである。即ち神の靈にいます如くに、靈を有ち、神の人格的にていますが如くに人格的である。

かく人格を備へたる人間が既に此世界に住んで居る。しかもこれは、神によりて造られて然るのである。然らば人格的なる人間の住む世界を造り給ひし神も勿論人格的であらねばならぬ。造りし者は造られしもの以上であらねばならぬからである。若し神は人格的以下のものなりとすれば、人間以下のものとなる。人間以下のものを、神として人間は拜することはできない。神は人格を備へたまふといふときは、人間に見る所のもの(人格性)を絶對に有ちたまふとのことである。

(イ)神は人格的なりとのことは、神は活ける神にいますとのことである。意思、決定し、工夫し、意匠し、愛す。これは活ける證據である。クリスチアンの神信心は、活ける神への活ける人間の靈魂の歸依である。人は死せるものを神として拜することはできない。人は生命なき木石と交することはで

(5)

きない。人は月や日にいのり得ない。これらのものは皆無人格的であるからである。
此點に就て、イスラヘルの聖詩人は、眞の唯一の神と、他の偶像とを對照し、偶像崇拜の愚を指摘するところ正に痛烈を極めて居る。

彼らの偶像は白銀と黄金なり

目あれど見ず

耳あれどきかず

鼻あれどかゝず

これに依頼むものは之に等し

偶像崇拜は所詮、神觀念の極めて低劣なることを表はすものである。

(ロ)神は人格的にますとのことは、又神は我らの「父」にていますこととなる。

神は「天に在す父」なりとの基督教獨特の神觀念である。これは神の獨子——「神の眞像」にして、神を世に現はさんとて此世に來りたまひしイエス、キリストによりて明に示された。

神は人格的なりとのことは、イエス、キリストが、神は「天に在す我らの父」なりと仰せたまふことによりて、最も明晰にかつ徹底的に示したまふた。弟子らの求に應じて祈の模範を示したまひしとき、神を呼び掛くるに「天に在す我らの父よ」と呼ぶやう仰せたまふた。それ以來、此祈は教會とク

リスチアンの間に用ひられて居る「主禱」の冒頭の語となつて居る。

神は「父」なりとの觀念には、神は(一)活けるもの、(二)愛心あるもの、(三)保護(四)指導(五)祐助を與へたまふとの觀念が含まれて居る。かくの如き父なる神いまして、我らを一々其御心に留め、其愛の攝理を以て我らを導き護り助けたまふとのことは、風波多き此世の旅路に、さまざまの悲み、惱み、苦み、病に逢ふものにとりて如何ながりの慰藉と希望と安心とを與ふるぞ。基督教信仰生活に入る経路は、人によりて種々様々なれども、神は「父」にて在すとの一點を知りて入信せしものも、世には決して少くはない。

(二)神は道德的の神にいますこと。

苟も萬物の靈長たる人間が宗教信念の對象として信じ、かつ拜せんとする神たる以上、其神は道德的であらねばならぬ。何故となれば、かく拜せんとする人間も道德を辨ふるものであるからである。人は非道德的のもの——木石金銀にて作りしもの、日月山川に祈願し得ない。若し然かするとせば、それは迷信である。妄信である。日常生活に於ても、人は道德的に信用あるものに信頼せんとす。況んや、宗教的に絶對信頼をおかんとする「神」に於てをや。

人は不道德のものを拜し得ない。基督教の初て世に現はれし昔の宗教—ギリシヤ、ロマの宗教には随分道徳的にかがはしきものが禮拜の對象とせられて居た。其神殿なるものにも、いかがはしきことの行はれたものもあつた。さりながら苟も相當の識見あり、教養あり、相當に道徳を辨ふる人々の宗教の對象となるべきものは、道徳的——最上、最高、最全の意味に於て道徳的であらねばならぬ。基督教にいふ神は正にかくの如きものにいます。此意味に於て、神は人間道徳の本源である。

(イ)神は聖にしています。『我聖よければ汝らもきよくすべし』。の不淨不潔は神の不問に置きたまはざる所である。あらゆる不義、道徳的の不潔、不淨は聖なる神の御旨に反す。従て此神を信じ、之を拜する者の心も、行も、生活も、おのづから聖となる。又聖となるやうつとむる。

(ロ)神は義にしています。神は正義の本源である。神は正邪曲直の最後の審判者である。故にあらゆる不義不正は神の前には許るされない。人が此神を拜する前にはあらゆる罪惡は除かれ、改められ、きよめられ、赦されねばならぬ。神の義は「積極的なる社會良心の基底を提供した」(ゴア)。

此點は充分認識せられねばならぬ。「神は侮るべきものにあらず」。あらゆる罪惡—個人的のもの、社會的の罪惡は、神への信仰とは兩立しない。

神の山に昇るべきものは誰ぞ

手清く心いさぎよきものぞ其人なる
とイスラヘル聖詩人はいふ。

神の聖、神の義は、神を敬ひ、神を畏るる信念の根基である。今日、あらゆる社會弊の根底に横はる病因は、此神を認め、此神を畏れざることである。

(三)『神は愛なり』新約聖書中、最も短き句にして、かつ最も意味深長なるは此一句である。之は神に關する基督教特獨の觀念である。これはイエス、キリストの出現により、其教と、其生活と、其業とによりて、最も明にせられし點である。

元來、愛は發動を意味す。神は愛なりとは、其愛の發動を意味す。世界の造られしも、人間の造られしも、人間の生存に必要なものの造られしも、皆神の愛の發動の結果である。而かも神の愛の最も大なる發動は「神の獨子」イエス、キリストの救主—贖主として此世に現はれたまひしことである。之は神の最大最高最上の啓示であつて、基督教體系は一に此事實に基て居る。通常「クリスマス」と稱せらるる教會の祝祭は此事實を記念するものである。紀元はこれを堺として、前後に別けられて居る。

然るに此「神は愛なり」とのことは、神は聖なり、神は義なりとのことによりて、常に補合せられねばならぬ。神の愛のみを力説するときは、神を敬ひ、神を畏るるよりも、神に「馴れる」に至る愛なしとしない。此點は用心せねばならぬ。

されば「我は天地の造主、全能の父なる神を信す」といふとき少くとも以上の諸點が含まれて居ることを念頭に置かねばならぬ。クリスチアンは實に此神を信じ、此神の救ひ、此神を畏れ、此神に頼りたのみ、此神に祈り、此神を愛し、此神に仕へんとするものである。

此神への信仰こそ、恐らく今の日本に最も必要なる更新の原動力——本源であらねばならぬ。此神への信仰を抜きにしては、眞の更新はいづれの時代、いづれの國所にも達成せらるることは覺束なし。

二、基督教道德

然るに此に注意すべきは信仰と道德とは緊密なる關係のあることである。正き信仰と正き道德と相俟ち相合せて、正き人生觀出で來り、又正き生活も出で來る。故に神への信仰の有無は其人、其社會

の道德に著き影響を及す。「愚なる者は心の中に神なしとせり」。其結果は如何。「かれらは腐れたり」道德的に腐敗せりとのことである。神を無視するの結果は、屢々「我らくらひかつ飲むべし明日は死ぬべければなり」との享樂主義的、無希望的の人生觀を生じ來る。一切の罪惡、不義、不正は、神を無視することに源を發して居る。道德の本源たる絶對者——神に對し責任を負はざるが故に、人は法律に觸れざる限り、(或は此に之をくゞりて)道德上、不都合なきものと考ふるに至る。かくして世に利己主義、非愛他的の行動は出で來る。

勿論、基督教は道德でない。されど基督教の神は道德的なる神にいます以上、基督教は至上の意味に於て道德的宗教であらねばならぬ。「善き樹は善き果を結ぶ」。崇高なる信仰は崇高なる眞徳と道連れする。

されば基督教道德は基督教信仰に基けるものである。即ち神を信する信仰より出で來れるものである。これには二の根本觀念が伏在して居る。

(イ)此宇宙には眼にこそ見えぬ、神——聖にして、義に、愛なる神の在すこと。(ロ)而て此神こそ道德の本源であるとのことである。

此神を信する結果、基督教生活には、此神の性格の表現たり要求たる道德出で來る。これは基督教

基礎道徳である。

イエス、キリストは基督教道徳を二句に要約したまふた。『なんぢ心を盡くし、精神をつくし、意志を盡し、主たる汝の神を愛すべし。是れ第一にして大なる誠命なり、第二も亦之に同じ、己の如く汝の隣を愛すべし』。

之は通常「十誡」と稱せらる。(一)我(神)の外、何物も神とする勿れ。神は唯一にして、神の外に神はないからである。(二)「偶像をつくりこれに平伏し仕ふる勿れ」。偶像崇拜は神に對する一種の冒瀆である。天上、天下、地上、地下に、神に比ぶべき何物のないに拘らず、他のものを以て之に代へんとするからである。されば結局、偶像崇拜は神觀念の低劣たる爲である。眞の拜すべきものを知らぬ爲である。(三)「汝、神の名を妄りに言ふ勿れ」。(四)「汝、安息日を聖として忘るる勿れ」。之は神を禮拜する爲に一週中の一日を聖別することを意味するとともに、勞働の原則——一週間六日働くことと、勞働の尊きこととを意味して居る。

以上は神に對して人間の守るべき義務である。

以下は實踐道徳である。(五)「汝の父母を敬へ」。(六)「汝殺す勿れ」。(七)「汝、姦淫する勿れ」。(八)「汝、盜む勿れ」。(九)「汝、虚偽の證を立る勿れ」。(十)「汝、貪る勿れ」。

(12)

『これらの十誡——簡潔にして峻嚴なる禁令は、(神の選民たる)イスラエル人の靈的並に道徳的生命の成長する土壤に、外來の異分子の影響を遮斷する石垣である』(C. Gore: Christian Moral Principles, p.14) されど今日といへども、基督教信仰と道徳の基底を爲す所のものである。

これらはいづれも皆(一)人類の福祉と、(二)社會の平寧と、(三)家庭の幸福と(四)個人の品徳に關するものである。これら後半の實踐道徳を尙仔細に點檢するときは如何。

「汝の父母を敬へ」。これは十誡中唯一の積極的誠命にして、家族尊重の基本である。此誠は生命に關する基督教觀念と關聯して居る。此生命は我ら汝には父母に依りて傳へ與へられた。「生命は生命より出づ」。生命の本源は神である。勿論、人は生命を造り出し得ない。我世に在ることは、父母によるとはいへども、其本源をたゞせば、我の生れし來しは神に依る。『古代人のうち、ユダヤ人ほど其深き強き宗教的精神よりして家庭は神聖なりとの念を發達せしものは稀である』(ゴア二二頁)。ユダヤ民族の連続と、其強靱性は此にありと稱せらる。

此誠命には又結婚の神聖なること、子女増殖の尊重すべきこと、嚴峻なる家庭訓練の肝要なることが含まれて居る。

(13)

日本は孝道の發達に於ては、從來、他國に比類を見ずと誇り來りしも、近時、諸種の外來思想の爲に、動もすれば、此美德も輕ぜられ、時としては顧みられざらんとするは憂ふべきである。

「汝、殺す勿れ」。此誠の與へられし昔のユダヤ人は慄悍であつた。故に此點に充分に訓戒を受くる必要があつた。されど此誠は(一)死刑廢止の意味でなかつた。死刑はユダヤの律法にも少くない。(二)又戦争廢止の意味でもなかつた。彼らは當時エホバの敵と戦はねばならなかつた。之は勿論、完全なる律法でない。其への一步である。之は人の生命をとりし報復として、私仇を果すことを止めた。

此誠の根本精神は人間相互の人格の尊重にある。『凡そ人の血を流すものは、人、其血を流さん、そは神の像の如く、人を造りたまひばなり』(創世記九ノ六)。『神の像の如く』に造られたる自身の人格尊しとせば、他人の人格も同様、尊重せねばならぬ。人各は神の前に同一の價値を有つ。而かも人格の尊重は、其竟極の點に於ては生命の尊重である。「生命は生命より出づ」との拉典の諺は、科學の知識の發達せる今日に於ても、尙生物學上の原理である。人は生命を創造し得ず、唯之を繼續し、之を保護するのみ。生命は萬物の造主たる神より與へらる。故に人は固意に之を毀損するの權はない。自分

の生命に於て然り、況んや他人の生命をや。故に此精神よりせば、われらは人の生命を殺害する權はない。(國が正當の理由の下に戦争に従事する場合は例外として)(二)同時に自分の生命を害する權もない。固意の自殺は宜くない。(三)墮胎も罪惡である。既に胎内に發育を初めし「新生命」を、此世に出生して、發育する機會を提供せず、故意に之を斷絶せんとするものであるからである。此度のラムベス會議(1930)(十年毎に開かる世界に於ける聖公會の監督會議の「決議」も「報告」も痛烈に之を非難して居る。

此誠を基督教的に解釋すれば、(一)「公會問答」は消極的には、「行爲を以ても、言語を以ても、人を害せず……恨み憎む心を抱かず」として居る。克蘭マー大監督は之を註釋して曰ふ「神は汝の手を以て殺す勿れといひたまはず、又汝の劍を以て、又は槍、或は銃を以て殺す勿れといひたまはず神は唯『汝、殺す勿れ』といひたまふ。其意味は汝は身體と靈魂とにて成れるものなれば、身體の如何なる部分によりても、又内部の精神若くは意志によりても、又は行爲若くは言語に於ても殺す勿れとの意である」と。凶器を以て殺すのみは殺人行爲でない。之には法律上の制裁がある。されど手を以てせずとも、口を以て、心を以て、意志を以て、人を害することもある。之も一種の道德的殺人となる。

「山上の説教」に於て、我らの主イエス、キリストはユダヤ人の金科玉條たりし「十誡」の或部分を神の權威を以て修正したまふた。第六誡も其一例である(マタイ五ノ二十一)。「古の人に殺す勿れ、殺す者は審判にあづかるべしと言へることあるは汝らきけり。然れど我、汝らに告ぐ。すべて兄弟を怒るものは審判にあるべしと。」殺人の素因を爲す動機を戒めたまふたのである。

故に「公會問答」は、(一)積極的に之を解釋して、「人と交るには眞實を盡くすべし」といふ。之が爲には(一)人を赦す寛大なる精神を涵養せねばならぬ。聖徒パウロはいふ、「キリストにありて、神汝らを赦したまへる如く、汝らも互に赦せ、(二)又われを害はんとする者の爲に祈る心掛もなければならぬ。」汝らの仇を愛し、汝らを責むる者の爲にいのれ」イエス、キリストいひたまふ(マタイ五ノ四四)。

聖書に記さるる第一の殺人罪は、カインがアベルを殺せしことである。此場合、猜は殺人の原因を爲し、怒は遂に殺害を敢てするに至らしめた。兄は耕作に従事し、弟は狩獵を事として居つた。兩人をも各其所得を以て神に供物を献げた。然るに神は(献ぐる者の心事の相違によりてか)アベルの献物を喜みしたまふた。カインは怒りて、アベルの野にあるとき、彼を殺した。殺害の前に怒あり、怒の前に猜があつた。聖書に人間墮落の記事に引續きて、殺人の記事あるは、注意すべきである。聖徒ハネ曰ふ「カインに倣ふな、彼は悪しき者より出で、己が兄弟を殺せり」(壹ヨハネ三ノ十二)。

要するに「汝殺す勿れ」との戒律は、基督教實踐道德としては(一)自他の生命の尊重(二)殺すに至るべき動機を除き去り、(三)進んで愛の精神を以て、行動すべきことを教ゆるものである。若し此精神にして守られ、行はれんか、個人と個人との間にも、家庭のうちにも、又國と國との間にも、平和は保たるるであらう。歐洲大戦は「殺す」ことの慘禍の如何に甚大なるかを示した。此世に眞の人類愛の行はれざる限り、眞の平和は見ること難いであらう。基督教道德は此點を力説し、又之が實行を助長する。

「汝、姦淫する勿れ」之は男女間の道德に關する基督教道德の最も肝要なるものの一である。基督教道德に於ては、原則上、既婚者にも、未婚者にも、貞潔の要求せらるることを示す。従て法律上の犯罪となるべき姦淫行爲は勿論、未婚者並に不婚者のあらゆる淫行を罪的なりとす。

姦淫が罪なりといふには、凡そ三の理由がある。

(一)姦淫は神に對する罪である。神いひたまふ「われ聖ければ、汝らもきよくべし。」昔ダビデ王が此罪を犯したるとき、其罪を悔めて「我は主に罪を犯したり」と懺悔せしも之が爲である。其實際行爲は部下の將校の妻を犯したることなるも、之は其根底に於て、聖き神を無視したる行爲であつた

からである。故に其犯行は其將校と其妻に對する罪なれど、『主に罪を犯したる』こととなる。

されば後世、聖徒パウロが淫風盛んなりしコリントのクリスチアンに對し、『神のわれらを招きたまひしは、汚穢を行はしめん爲にあらす、潔からしめん爲なり。其故に之を拒むものは、人を拒むにあらず、汝らに聖靈を與へたまふ神を拒むなり』と警告を與へたのである。

古より男女間の不貞潔に關する訓戒は、多くの聖賢によりて與へられた。されどイエスキリストの『凡そ色情を抱きて、女を見るものは既に心のうち姦淫したるなり』(マタイ五ノ二八)にも勝りて、其規準の崇高にして、其語調の峻嚴なるものは未だ曾て他に見しことはない。心、先づ淫して、行、之に伴ふて淫す。意志的姦淫は行爲に於て現實にせられざるが故に、法律上の犯罪を構成せずとも、神の前に罪たることは免かれない。

(二)次に姦淫並に其他の淫行は自己の身を犯す罪である。聖徒パウロいふ『汝らの身はキリストの肢體なるを知らぬか……淫行を避けよ。人の犯す罪は身の外にあり。されど淫行の者は、己が身を犯すなり。汝らの身はその内にある神より受けたる聖靈の宮にして、汝らは己のものにあらざるを知らぬか』(コリント前六ノ九五十六)。此に身體に關する崇高なる基督教觀念よりして、淫行の罪たるが力説せられて居る。

世には身體を以て罪惡の根據なりとし、難行苦行、之を痛め、之を鍛ふるを以て、人間修養の要目なりとするものもある。或は身體は自己の所有なれば、之を自由に用ひて、本能的の慾情を満足せしむるに於て、何の差支があるかと考ふるものもある。いづれも其當を得たのではない。

身體は神より受けたるわれらのうちにある「聖靈の宮」である。「宮」とは神の宿る祠堂の意である。誰も「宮」を犯すものはない。身は若し神の宮なりとせば、敢て之を犯すべきでない。而かも淫行は其尊嚴を犯すこととなる。

聖書に見ゆる不貞潔罪は二種ある。一は既婚者の不貞潔行爲、他は未婚者の不貞潔行爲である。前者は法律上の制裁あれど、後者は法律上の何ら制裁がない。故に其弊害最も多い。勿論貞潔は既婚未婚の如何に不拘、神によりて人間に要求せらる。既婚者と雖ども『神を知らぬ異邦人の如く情慾を放纵に、すまじきことを知る』ことを要求せらる。既婚者の不貞潔罪は、夫婦の關係以外に絶対に第三者を(男にても女にても)其間に容るることを許さざる結婚の神聖なる結縁を混亂せしむるものにして、之によりて家庭は破ぶられ、其平和は亂され、其子女は種々の惡風に感染せしめらる。其弊や實に人をして戰慄せしむるものがある。若し夫れ未婚者の不貞潔罪、即ち不正なる若くは不潔なる結婚外の性交に至りては、惡むべきことにして、其身體に及す弊害も亦實に恐るべきものがある。基督教道

徳に於ては未婚者は男女如何に不拘、正當に結婚の行はる迄、其身體の貞潔を完全に保つことを要求せらる。これは當然の要求にして、決して不可能なる要求でない。正式に國法の手續を履んで夫婦として結婚生活に入る時まで、完全に貞潔を維持することは、男にも、女にも、自制と努力と、神の恩寵の補助とによりて可能である。世には人間の此弱點に乗するあらゆる誘惑の手段あり、機關あるが故にとて、必ずしも之に同意して、己の貞潔を失ひ、其忌むべき、恐るべき影響を身體的にも道德的に受けねばならぬ必要は毫もない。たとひ世には平然として結婚前、結婚外の不貞潔行爲を爲す者があるが故にとて、我も亦其例に倣はねばならぬ理由は毫もない。神のわれらに求めたまふことは潔からんことである。

(20)

(三) 姦淫並に其他の結婚外の淫行は、他人との關係よりみるときは、愛の法則を犯す罪である。姦淫は勿論のこと其他の淫行には對者がある。従て此種の不貞潔行爲は自身の聖靈の「宮」を汚すことのみにて終らず、必ず其對者たる女若くは男の「聖靈の宮」をも汚すこととなる。之は不貞潔罪の最も忌むべき所以である。一人の「聖靈の宮」の純潔の汚がさるゝことは、既に惜むべく、嘆すべしとせば、同時に他の一人の純潔の汚がさるゝに於ては、尙更である。之は假に相方合意上行はるとするも、又は暴力によりて強行するとするも、若くは報酬金錢によりて、其事行はるゝにもせよ、

其結果に於ては同一である。己の情慾の遂行の爲に己が同胞たる兄弟若くは姉妹を欺き、若くは辱め、若くは弄ぶこととなる。之は決て愛の法則に合ふことにてあり得ない。神は「かゝることによりて兄弟を欺き、また掠めざらんことを」要めたまふ。若し既婚者にして此事ありとせば、之は其妻若くは夫を欺くのである。未婚者にして此事あらば、之は純潔なる乙女、若くは純潔なる青年を陥れて、其貞潔を蹂躪することとなる。而かも其結果は如何。純潔なるべき青年男女が、之が爲に心身ともに汚がされ、其品性亂れ、其品行亂れ、其生活荒び、遂に人生の敗殘者となり終ることは稀でない。故に古の使徒は戒めていふ「汝ら世を友とすな」と。世の貞潔觀念は低い。低き標準に従ひて、心を墮し、身を墮すなどのことである。今日にても然り。今の世は性道德は甚しく亂れて居る。貞操觀念も類れんとして居る。「友愛結婚」「試験結婚」「内縁の夫婦」、「一時的同棲」若くは淫行を伴ふ青年男女の所謂「戀愛遊戯」等、皆此戒律を犯すものにあらざるはない。淫行のみを恣にせんとする故意の避妊も亦然り。「聖書も、人類の本能も、神の最大の祝福の中に數ふる所のもの(子女の繁殖)を、人工的に妨げんとするは當を得たるものでない。「聖書は人類の健全なる本能を反映して大家族を光榮化し、之を歓迎す」(ゴア)。大家族主義を擯斥するは社會道義の頹廢の徴候なりと考へらる。

『汝、姦淫する勿れ』との戒を破りし結果は、個人の歴史にも、家庭の歴史にも、最も悲惨なる跡

(21)

を止めて居る。慎むべきは男女間に最も陥るべき貞潔に關する罪である。自制と神の恩寵の補助とにより、自己の貞潔を守り結婚の神聖を保ち、家庭の神聖を保ち、延て國家道德の健全を保たねばならぬ。

『汝、盜む勿れ』。

(一)所有物には所有權がある。所有權は法律によりて、いづれの國にても保障せられて居る。之を犯さば犯罪を構成す。

舊約時代には、モーセ法によりて、盜は嚴禁せられた。盜に對する罰も峻嚴であつた。盜みしものは辨償せしめられた。當時の財産たりし牛若しくは羊を盜める場合、五牛を以て一牛を償はしめられ四羊を以て一羊を償はしめられた(出廿二ノ一)。若し物を盜みて辨償し得ざる場合は、身を奴隸に賣りても辨償せしめられた。盜に類することも又嚴禁せられた。尺度、秤子、升斗に於ける不正行爲の如きはこれである。「汝ら尺度に於ても、秤子に於ても、升斗に於ても、不義を爲すべからず(利十九ノ三五)」「汝囊の中に一個は大きく、一個は小き二種の權衡石をいれおくべからず、汝の家には一個は大きく一個は小き二種の斗升をおくべからず、唯十分なる公正權衡を有つべく、また十分なる公正き斗升を

(22)

有つべし。凡てかくの如きことを爲すものは汝の神、主、之を憎みたまふなり」(申二五ノ十五―十六)即ち賣買其他に於て、不正手段は盜に類するものとせられたのであつた。

新約時代に於ても然り。我らの主イエス、キリストも此誠を是認したまふたことは、永遠の生命を得んが爲には何を爲すべきかとの或人の問に對し、主は『誠を守るべし』とて、列擧したまひし誠の中には『汝盜む勿れ』も含まれて居たことによりて明である。

聖徒パウロもコリント人に書き贈りし書中に『盜する者は今より盜すな。寧ろ貧者に分け得る爲に手づから働きて善き業をなせ』(エペソ四ノ二八)と戒めて居る。

此誠は簡單である。されど其精神の適用は廣汎に互る。

われらは法律上、犯罪となるが如き「盜」を爲ないであらう。されど基督教道德は之よりも遙に深く内心に立ち入り、たとひ法律上「犯罪」とならず、世人の眼にも「罪」と見えざるなす盜心若しくは盜心に類するが如きものを潜在せしめ、若くは之を外部の舉動にあらはして盜事に類することをも嚴く戒むる。

(二)神に屬するもの——神のものを盜むは、盜のうち最も恐るべきものである。アナニヤとサツピラの古事は其一例である。教會の創成時代には峻嚴なる制裁なるを必要とせしとはいへ、「共に資産を

(23)

賣り、その價の幾分を匿しおき残る幾分を持ち來りて使徒たちの足下に置」きし夫婦兩人共謀に對して、使徒ペテロは「アニナよ、何故、なんぢの心サタンに満ち、聖靈に對して詐りて地所の價の幾分を匿したるぞ。……なんぢ人に對してにあらず神に對して詐りなり」(使五ノ四)と面責した。兩人とも「倒れて息絶ゆ」とある。

當然神に献ぐべきものを、私することも、神のものを盗むこととなる。献金に於ても然り。クリスチアンにとりては、神への献金は、神のめぐみによりて、自身の勤務、勞作、其他の方法によりて、與へられし収入の初徳を献ぐることをなれば、収入のある際、これを以て他の何らの爲にも用ひざる前に、取り除き置きて、第一の機會に神に奉獻すべきものである。

人との關係に於て、直接に盗まずとも、盜に類することも屢々世に行はれて居る。又放任せば「盜む」ことに成長する行爲も尠しとしない。知らずして爲さば、改むべく、知りて敢てすることに於ては、基督教道徳よりせば大に責めねばならぬ。

自身に屬せざるものを無斷に使用するが如き此類である。他人に屬するものは、必ず其許可若くは承諾を経て使用すべきである。

註。竊盜幾犯にて捕縛せられし或青年が取調べられし結果、其告白によれば初め彼は店用の郵便切手を私

信の爲に使用せしが禍根を爲したとあつた。二千弗を盗みしと訴へられし少年は初め叔父より買物を托せられし時、七十二仙の釣銭ありしを、叔父が其釣銭のことを問はざりしに乗じて、之を私用せしことが盜事の素因を爲したと知れた。新約聖書に見ゆるオネシモも恐らく此種の誘惑に陥たのであらう。

官廳、會社、商店、學校等に勤務するものが、其官用、社用、店用校用の書翰箋若くは封筒等を私信に私用せんとするも、此誠を破るものである。公用の書翰箋若くは封筒を用ひし私信を受くるほど不愉快のことはない。一を見て其人の十を察し得る。本人は之を以て些細の事なりと考へ、悪事を爲し居るとは思て居ないかも知れぬ。もし然りとせば、其人の道徳觀念が尙低劣にして、良心の制裁の薄弱なることを示すこととなる。公と私とはたとひ些細の事に於いても判然區別せねばならぬ。一事は萬事である。小事は大事の萌芽である。

他人の書籍を借用して、返却を忽にすることも、此誠に觸れであらう。かくして我らの文庫から書物の逸散することも稀でない。

秘密を裏切ることも一種の盜である。他人の書翰を秘かに披見することも、此誠の精神に背く。後日盜心に發達すべき萌芽は此に包藏されて居ないとも限らない。

約束せしことを履行せざる事も此誠に觸れる。英語の「誠實」(sincere) は「無蠟」を意味する拉典

語 sine cero〔蠟無しに〕より來て居る。昔、ロマの受負師は、契約に於て無瑕の大理石を用ふと約束しながら、實際は瑕多き大理石を用ひ、其瑕口を白蠟を以て充填する不正行爲ありし爲、契約書に無蠟の石材を用ふと明記せるに因るといふ。約束せし正當のものを納付せずして、其以下の劣れるものを用ひんとするは一種の盜たるを免れない。今の世に此種のこと多く行はれて、人亦之を怪しまざるが如きは、道義心の低落を語るものである。

返却すべき見込なき、借金を爲すことも結局一種の盜となるを免れない。所謂「借り倒す」下心にて之を敢てするに於ては勿論である。

仕拂ふべきものを仕拂はざるも、一種の盜である。之は明かに他人に屬するものを敢て私せんとするものである。

同時に以上の反對に正當に受取るべき釣錢を、たとひ一錢二錢にても之を受取らざるも、知らず識らずして、盜心を培養することとなる恐れなしとしない。之は所謂「氣前を示す」とか、或は「小事に拘泥せず」とかの心事を誇り示さん爲ならんも、之は些少のものならんには、無斷にて他人のものを用ひて可しとの心事を潜めなれども限らぬ。「一錢を笑ふものは一錢に泣かん。」

金錢勘定上、一錢にて取るべきは取り、拂ふべきは拂ふことをせざる人物は、道徳的に其人格の何

處かに缺陷なしとも限らぬ。吝嗇と、良心の命ずる所に忠實ならんとすることの間には雲泥の差がある。

(註)數年前、英國滯留中、一監督は「日本人は召使の者にチップを多く與へ過ぐる。注意せよ」と忠告をうけた。これは屢々耳にする所である。而かも日本人はかくするを以て得意の如く見ゆるは淺ましい。

三井信託會社の米山社長の「釣錢」の話の中に左の一節がある。

忘れ難きはワシントンにある日、招かれて故ブライアン翁のホテルに朝餐を共にせる時のことである。翁はその自室にて私と食を取らうとしてボーイが卓上に持來つたメニューにつきて互に欲するものを選び、兩人好む所の注文定まりやがてちう房より用意される品々の程好くテーブルの上に案配され、ボーイの將に「いふして去らんとする時、翁はこれを送つて戸口に至り、低聲にて彼の「釣錢」を有するや否やを尋ねその有りといふ答へを、聞きて後始めてある貨幣をだし與へ、翁の豫めチップとして與へんとせる額を超過する多くの部分を引換に「釣錢」として受取つた場面を目撃し、米國人の風習を熟知はしてゐたものゝ、私も今更ながら驚嘆したことがある。翁は固より清貧の士である。このやうな舉に出づるのは、どうも金錢を守り惜むがためではなく、その經濟的觀念の發露せるものであるいはゆる。成金者流を除けば假令富有の人でも浪費を省き實用を重んずるは米國人の自から習慣性をなす所である。「釣錢」の受取方はもちろん、共同仕拂の割前勘定の如きもすこぶる嚴重である。これは我々日本人の學ぶべく心すべきことである。

(三)されば如何にして我らは此誠を守り、又其精神に添ひ得べきか。

(一)神相手の生涯を送らんとつとめよ。さすれば不正の行爲や舉動を爲すことを免がれるであらう

不正の行爲や舉動は、畢竟、神の臨在と、其審判とを無視するにあらずば行はれないからである。

神の山にのぼるべきものは誰ぞ

手清く心いさぎよきものぞ其人なる

「清き心」と「いさぎよき手」とは、基督教道徳生活の二大支柱である。「盗む勿れ」とは、要するに自分のものにあらざるものに、手を觸れざることである。「公會問答」は「我手は盗みとらず」といふ或商人が臨終に其數人の子供を枕頭に呼び集へて、有金を分配していふに『此金は多額でないかも知れぬ。然し一圓なりとも、「穢い金」は混て居らぬ』といふた。誠に尊いことである。

(一)良心の作用を鋭敏にすることを努めよ。世にはあまりに敏感ならずともよきことは尠くない。されど良心の命ずることに、例令、如何に些少のことなりとも之に従ふやうつとめねばならぬ。英語の "conscientious" (良心の聲によく従ふ人) の如き簡潔に意義深き語の日本語に見ざるは惜むべきである。盗心盗事に關しては、能ふ限り鋭く良心の作用するやうに勉めねばならぬ。

(二)「人と交るに眞實を盡くす」(公會問答)やう心掛くること。誠實公義、正直ならんと努力するは、基督教生活と品性の特徴の一である。世の人は不正直、不慎實なるが故に、我も亦不正直、不眞實にてありてよしとの道理はない。我はあくまでも眞實正直であらねばならぬ。これは眞實にいます

神のわれらに求めたまふ所である。ユダヤの箴言に「盗みたる水は甘く、竊かに喰ふ糧は美味なり」。「欺きとりし糧は人に抵し、されど後には其口に沙を充されん」(箴言九ノ十七)とある。

「汝、虚偽の證を立つる勿れ」。

此誠は本来の意味に於ては、裁判廷に於ける偽證罪を戒めたるものである。偽證罪はモーセ法に於ては嚴重に取調べられた。某は悪事を爲せしと偽證者ありて訴ふるとき、士師は之を調査し、其偽證なることの發見せられたるときは、偽證者が罪なき兄弟に蒙らしめんとせしことを彼に蒙らしめて、惡をユダヤ人より除くこととした(申十九ノ十八)。

此誠は簡單なれども其應用は廣い。元來、口を慎むことは人間には難事である。従て聖書は此點を戒むること屢々にして、かつ嚴重である。

舊約に於ては「汝、虚妄の風評を言ふべからず。惡き人と手を合はせて人を誣ふる證人となるべからず」(出二三ノ一)と戒めて居る。人の名譽を毀損することは容易ならぬ罪であるからである。「嘉名は大なる富に勝り」(箴言二三ノ一)「名は美膏に勝る」(傳七ノ一)からである。

此誠は會話に適用せられては、「汝ら互は眞實を言ふべし」(ゼカリヤ八ノ十六)とある。神の選民たる

ユダヤ人は皆兄弟にして互に隣人であるからである。「汝ら民の間をゆきめぐりて、人を讒るべからず」(利十九ノ六)。「陰かに其友をそしめるものは、神これを滅さん」(詩百一五)。「偽のことに遠かれ」(田廿三ノ七)など皆然り。

新約に於ても、此事は嚴重に戒められて居る。我らの主イエス、キリスト言ひたまふ、「たゞ然り、然り、否、否といへ。之より過ぐるは惡より出るなり」(マタイ五ノ二七)。之は饒舌、多辯、偽言、惡口を禁じたまふたのであるが、亦、口舌上、絶對の正直を要求したまふたのである。如何に言、多くとも、又如何に言、巧みなりとも、其語る所を詮じ詰むれば、「然り」若くは「否」のいづれか一に過ぎないからである。

聖徒パウロも初代の信徒に此點を訓戒せること屢々にして「互に偽を言ふ勿れ」(コロサイ三ノ五)「虚偽をすて各自、隣に實を語れ」(エペソ四ノ二五)といふて居る。

非經書中の「教會書」にいふ「愚なる者の心は口にあり。されど賢き者の口は其心にあり」(二二ノ二六)。とある。

(二)基督教道徳よりせば、偽の罪は二重である。

(イ)神に對する罪である。「すべての密事は主にかくることなし。」神には一切の秘密は皆赤裸々に暴露せられて居る。従て偽ることは、萬事萬想を悉く知りたまふ神を欺かんと試むるものであるからである。之は勿論、理論上、不可能のことであるも、人は知りてか、識らずしてか、絶へず此罪を犯して居る。

(ロ)人に對しては、愛の精神に背き、敬意を缺くことである。「眞の愛は人の惡を思はず」(コリント前十三ノ五)。人を偽るは畢竟、其人を愛しないからである。人を偽るは、其人を敬重しないからである。人はおのれの尊敬する人に對して、偽ることは稀である。愛する者を欺くは許すべからざる裏切である。此誠を受けし本來のユダヤ人にとりては、他人は隣人であつて、又兄弟であつた。従て相互に眞實を以て應對すべきことを期待せられた。然るにクリスチアン同志は、其以上にして相互にキリスト體の肢である。「われらも多くあれどキリストに在りては一の體にして、各人たがひに肢たるなり」(ロマ十二ノ五)。従て偽は兄弟同志打である。かくては一種の道徳的矛盾である。神を信じ、隣を愛するクリスチアンには、口舌の眞實は當然のことであらねばならぬ。

(註)此該は「盜む勿れ」の該と隣つて居る。或少女は或時其母に「母様、偽ることは盜むことより一層よくないと思ふ」と告げた。「何故」とたづねると「盗んだものは、惡かつたと思へば、之を返すか、又は金錢を以て反濟することができぬ。しかし一旦口外した偽は取返ができぬ」と答へた。其通である。

(三)然るに人は實際此口舌の罪に陥り易い。勿論、これは口舌其のものゝ責任でない。口舌も亦神のわれらに與へたまひし身體の機關の肝要なるものゝ一である。之は善用すべきである。聖徒ヤコブは、其書中に、パレスチナの風物に取材として、馬は轡によりて自由に動かされ、船は舵によりて、舵取の意のまゝに繰らる。されど『人、誰も舌を刺し得ず(ヤコブ三ノ八)と嘆じて居る。勿論「失言」と稱するものがある。時として人は心もなき言ひ誤りを爲すことがある。之は故意にする偽でない。然るに偽言に至りては如何に小き偽にても偽である。狐は如何に小狐なりとも狐である。

偽をいふは恰も石を坂の上より轉ばし落すが如くである。中途にて止めることは難い。落つる所まで落ちずば止まない。偽をいへば偽を重ねる。偽は屢々偽の環をつくる。一旦偽といふときは、これを訂正せんとて他の偽をいふ、又之を訂正せんとて更に第三の偽をいふ、第四第五の偽も亦然り。

世に「正直は最上の政策なり」と稱せらる。然るに實際、商品に「掛値」あり、又買手も之を値切る。されど偽をいへば、商賣はできぬといふことはあるまい。

古の日本の武士は然諾を重んじた。武士の一言には信用はあつた。眞の紳士の一言亦然かあらねばならぬ。クリスチアンは其特質上、眞の紳士である。従てクリスティアンの一言には無上の信用をおかれねばならぬ。古の「武士の一言」なる諺は、今日にては「クリスティアンの一言」に代へられねばな

らぬ。

(註)米國のミネソタの舊土人は、其地方の教會を管理せしホキツアル監督を「直舌」——眞直の舌の人——
"Straight Tongue"と綽名した。舊土人は常は商人又は官吏に欺かれて、交易上、損する所多かつた。故に白人とみれば、舌の正しくない人と思ふて居た。然るに此監督の言ふ所は充分に信を措き得ると確信して、遂に此綽名が出て來たのである。綽名には皮肉のものあり、諷刺的のものもあるも、此種の綽名はむしろ一種の名譽ではあるまいか。

神はわれらに二の手、二の眼、二の耳、二の脚を與へたまふた。然るに舌は唯一である。之は一筋に正しく之を用ひしめんとてある。クリスチアンは此一つの舌を正しく用ひんとする者である。「二枚の舌」を使はざる人である。

「鶏頭や裏表なき咲き心」

其いふ所表裏なきこそクリスチャン紳士の特徴である。

「若竹や我が子にほしき育ちぶり」

醫者は病人を診察するとき、患者の舌を見る。之によりて其健康状態を察する。されど舌は又其持主の心の状態を示す。

一世の中に虚偽行はれ、世の人に偽といふ者多かればとて、われも亦虚偽の行動を爲し、偽をいはねばならぬ道理はない。クリスチアンは口舌のことにかけて「地の鹽」であらねばならぬ。

偽をいふことは畢竟、神を畏れず、神を敬はず、無視し得ざるに神を無視せんとする結果である。人を欺き得ても、神は欺かれたまふことはない。

(四)さればわれらは如何にして偽をいはざることをつとめ得るや。

(イ)神を畏れよ。「人を相手にせず、神を相手にせよ」と維新の三傑の一人がいふた。其「神」はクリスチアンの神にあらずとするも、此心得あらば舌を二つにする過に陥らないであらふ。

(ロ)人を愛するの故に誠實ならんとつとめよ。

(註)奴隷廢止前、米國南方には黒奴賣買の市場があつた一日、刑巧なる一少年が奴隷が市場に曳き出された。親切なる買手あらはれて、之を憐み、買取らんとして、「おまへを買取るとき、おまへは正直であるやうつとめるか」と問ふた。少年黒奴はいぶかしげに「御買くださされても、くだされなくも、私はいつでも正直である積です」と答へた。之こそ正直の極意である。世に此少年黒奴の一言に對して面赤らむ偽而非紳士もあらう。

(ハ)我口は罵り、詐る誹ることをせず(公會問答)。言を出すときは常に人の徳を建るやう心掛くる

ことである。「汝の言は鹽をもて味ふべし」。

『汝、食る勿れ』

基督教十誡の最後のものである。本文には「汝、隣人の家を食べる勿れ、隣人の妻、奴隷、婢女、牛、驢馬、又凡て隣人のものを食べる勿れ」とある。これらのものは當時ユダヤ人にとりては富の表象―富を代表するものであつた。従て舊約聖書にはアブラハムの富を示すに「羊、牛、僕婢、牡牝の驢馬および駱駝多し」(創二十四―三四)と記され、又富裕なるものを示すに「其の人多くの家畜と僕婢および駱駝、驢馬を有つに至れり」(創三十ノ四三)といひ、或は相當の身分となれるヤコブは「我れ牛、驢馬、羊、僕婢あり」といふて居る。さればこれらのものを「食べる勿れ」といふときは、他人の所有物を食べる勿れといふ意味である。従て此律法は富に關する此種の理想と標準とを有てるユダヤ人に與へられしものにて、文字通り今日に適用し得ずとするも、其律法の精神と原則に至りては、何時、何處に、何人にも適用し得らるものである。此點よりして之は基督教基礎道德の一とせられて居る。

(一)此精神に従ひて、聖書には、食ることに關する戒と事例は尠ない。

カナン攻入の際、大將ヨシユアの嚴命は、敵陣陥落すといへども、土地のものは神に誼はれたるも

のなるが故に、決して自分のものとして取る勿れとのことであつた。然るにアカンなるもの、此禁を犯して、バビロンの美衣一枚、銀二百シケル、重さ五十シケルの金棒を隠匿した。此事露見するや、本人は勿論、其男兒、女兒、牛、驢馬、天幕など、一切をアコルの谷に曳きゆき、石にて打ち殺した上、燒棄てた。

施洗者ヨハネがユダヤの野に叫びて悔改の必要を説くや、其許に來りし收税人の、『師よ、われら何を爲すべき』との間に對して與へし答は、『定りたるものゝ外、なにをもはたるな』とのことであつた。兵卒も亦同様のことを問ひしに、『人を劫やかし、また誣ひ訴ふな。己が給料をもて足れりとせよ』と戒められた。

われらの主イエス・キリストが、人の心と罪惡との關係を教へたまひしとき、『人より出づるものは、人を汚すなり』として、『内より出で、人を汚す』『惡しき事』の二に、『慳貪』を數へたまふた(マルコ七ノ二二)。又『慎みて凡ての慳貪をふせげ、人の生命は所有の豊なるに因らぬなり』(ルカ十二ノ十六)とて愚かなる富める人の譬を語りたまふた。畑、豊かに實りたれば、在來の倉を毀ちて、更に一層大なるものを建て、其處に穀物を入れ、かくて其靈魂に向ひ、『靈魂よ、多年を過すに足る多くの善き物を貯へたれば安ぜよ、飲食せよ、樂しめよ』といはんとした。然るに神かれに『愚なるものよ、今宵、

なんぢの靈魂とらるべし。然らば、汝の備へたるものは、誰かものとなるべき』と言ひたまふた。かくて戒告していひたまふ『己のために財を貯へ神に對して富まぬものは斯の如し』と(同二十一)。

されば使徒パウロも此の點を戒めて、『それ金を愛するは諸般の惡しき事の根なり』とし、『富まんと欲する者は誘惑と良また人を滅亡と沈淪とに溺らす愚にして害ある各様の愁に陥るなり』といふて居る(テモテ前六ノ十六—二二)。之は昔も今も變らざる眞理である。

(二)「貪る」ことは、いつの世にも、何人にも乗せられ易き弱點にして、又敗れ易き誘惑である。されば之が對抗策は如何。

(イ)神を敬ひて足ることを知ることである。「敬神知足」はクリスチアン生活の標語とすべきものである。

『足ることを知りて、敬虔を守る者は大なる利益を得るなり』。何故となれば、『我らは何を携へて世に來らず、また何をも携へて世を去ること能はさればなり』(テモテ前六ノ六、七)。故に『衣食あらば足れりとせん』と老使徒は青年テモテを訓戒して居る。

足れりとせざる精神、足ることを知らざる心は、神のめぐみ——賜物を充分に感謝せず、又相當に之を鑑賞せざるより來る。神の賜物に不足を覺ゆるものは、やがて自分と他人とを比較して、種々の不

平と不満を抱くに至り、遂に詐偽、收賂、盜取等の忌むべき犯行を見るに至る。「萬引」の心理も亦此にある。

(ロ)次に勤勉である。怠惰を戒むることである。「働かぬものは食ふ權なし」とゴア監督はいふ。此戒律はユダヤ人に興へられし其原形に於ては消極的の禁令であつた。然るに貪の心を起さずらんが爲に、ユダヤ人勤勞を尊び、手工を重じた。ユダヤの少年は皆一種の手工を教へられた。我等の主も木匠なりしヨセフのナザレの工場に手工に従事したまふたことを察せられる。聖徒パウロは天幕を作つた。ユダヤ人は又怠惰、奢侈を擯斥した。

(ハ)同時に虚榮心を戒めねばならぬ。世の罪惡の多分は此に動機を發して居る。「これ(金錢)を慕ひて、信仰より迷ひ、さまざまの痛をもて自ら己を刺しとほす」ものも尠くない。故に「公會問答」は教へていふ、「他のものを貪らず、自から職業を勵みて、生計を立て、又神の定めたまふ身分に應じて我業務を盡すことなり」(新舊書二七三頁)。

要するに基督教の日常道德の基調は、われらの主イエス、キリストの仰せたまひしが如く、(一)神を愛し、(二)又おのれの如く人を愛するにある。これあらば「殺す」ことなく、これあらば「姦淫す

る」ことなく、これあらば「盜む」ことなく、これあらば、偽をいふことなく、これあらば「貪る」こともないであらう。近時英國其他に基督教界の耳目を聳動しつゝある「グループ、ムーブメント」(The Group Movement)も、其標語として(一)正直(Honesty)(二)純潔(Purity)(三)無私(Unselfishness)(四)愛(Love)を力説して居る。畢竟これは基督教基礎道德の再肯定に外ならぬ。

基督教信仰と、基督教道德とは、經緯相織り成して、此に基督教品性成る。此三者は等邊三角形の如くである。底邊は左右兩邊と相離し得ない。基督教信仰生活は底邊であり、基督教道德と品性とは其兩邊である。基督教信仰なくば、基督教道德なく、基督教品性あり得ない。

十誡は自戒である。クリスチアン生活の自省自察の規準を示す。毎日の生活の終りに、此規準に照らして、靜思回想し、若し我が弱きが故に、右の middle づれのにも犯せし點あらば、之を神に懺悔し、同時に之を改めんと決心し、進んで一層よく十誡の積極的精神たる神を愛し、人を愛する理想に進み行んが爲に、神の祐とめぐみを祈らば、徐々ながらも、日々基督教的美徳に進み得るに相違ない。

此理想と心掛とは、よく「家族の祈禱」中、朝のいのりの第五にあらはれて居る。

『主よ、今日も思恵を以て守りたまはんことを冀ひたてまつる。願くはおのく身を修め、職業を勵み、主の懲戒を忍びその分限に安んずることを得させたまへ。人と交るには眞實を守り、柔和にして、慈悲ぶかく、力に應じて助を爲のことを教たまへ。また我らを導きて其業を榮えしめ、危難を防ぎ我らと我らに屬

するものを保ち、その他すべて必要なものをあたへたまへ。主イエス・キリストによりて希ひたまつ
る アメン。(五五一頁)

X X X
基督教信仰と道徳との關係略以上の如し。されど基督教は單に道徳の規準を示すのみならず、進ん
で其高尚にして嚴峻なる道徳を實現する力——助を提供する宗教である。然らば、此力——助は何處
より來るか。之はめぐみ(恩寵)によりてである。

三、基督教恩寵

(一) 恩寵(恩惠)とは元來基督教用語にて、無償にて人間に與へらるる神の靈的賜物をいふ。『凡ての
善き賜物と、凡ての全き賜物とは、上より、もろ／＼の光の父より降るなり』(ヤコブ一ノ十七)。その
もろ／＼の賜物の中、最も尊き、又最も難有き大なる賜物は、イエス、キリストを世に遣りたまふた
ことである。此イエス、キリストは恩惠の本源にいます。

(註一)。故ゴア監督の絶筆「リタリー瞑想」中にいふ。

此の恩寵とは何か。かく翻譯せられて居る原語のギリシヤ語は、何事によらず、凡そ美はしき「優雅な
る」事物、資質、實若くは行動と、これによりて生ずる反應的の感恩感謝の念を意味した。

舊約聖書にありては、此語は特に上長者が下級者に對する寵愛若くは好意を意味した。從の神の人に對
する寵愛若くは好意を意味した。

新約聖書にありては、此語は(特に聖徒パウロの愛用せるものなるが)イエス、キリストによりて表示
せられたるが如く、ユダヤ人たる、異邦人たるを問はず、其間の障壁を撤廢せる神の普遍的好意を表
示する語となつた。——「凡ての人に救を得さす神の恩惠」(テスト二ノ十一)は、イエス、キリストによ
りて來れる「恩惠」である。

然るに教會歴史上、特に拉典語の翻譯にありては、恩惠(Gratia と譯せらる)は稍新舊義を取るに至つ
た。當ちこれは超自然的の能力——(殆んど聖靈の作動と區別せられて居ない)——にして、新生活を送り
得せしむる爲の教會の特殊の資能を意味することとなつた。從てパプテスマの特殊の恩惠、信徒按手の恩
惠聖餐の恩惠など稱するに至つた。又謙虛の恩惠、忍耐の恩惠などいふことをも耳にするに至つた。

(C. Gore: Reflections on the Litany, p. 67)

此恩寵は神の愛と、神の赦に於いて、最も著しく顯はされた。

イエス、キリストは神の愛を啓示したまふた。其教に於て、其行爲に於て、これを啓示したまふた。
「神は愛なり」。イエス、キリストは實に神の愛の權化にいたしました。イエスの風格に接するは、神の
愛に接するのであつた。イエスの教を耳にするは、神の愛のメッセージを耳にすることであつた。イ
エスの一撫は神の愛の接觸であつた。イエスの一眺は、神の愛の表現であつた。「普くめぐりて、善き
ことを行ひたまひし」とは、其地上三年の宣教師生涯が到る處、神の愛を其業に示したまひしことを

物語るものである。

神の恩寵は又神の赦として、イエス、キリストによりて示された。

赦は人の要求する所のものである。人は赦されんことをねがふ。罪の念に苦めらる事ほど、人に苦きことはない。イエス、キリストは信仰あり、悔心のある處、此赦を人に與へたまふた。『汝の罪赦さる』。罪を赦し得るものは唯、神のみ。イエスは此赦の歡喜を與へたまふた。

神の赦は神の愛の一形相である。

而て最後にイエス、キリストは、十字架上に、萬世に亘り、萬民に、最も深き印象を與ふる形式に於て其最後を遂げたまふた。これは神の愛と神の赦の最も有力にして、かつ最も有効なる表現であつた。

(43)

然るに神の愛の絶頂たるイエス、キリストの十字架は、人間の歴史上、一定の時と一定場所にて、後にも、前にも、唯一回生ぜしことにて、これは反覆せられない、又反覆せらるべきものでもない。されど其功德は、世に人の存する限り、萬世に亘りて、萬民に及さるべきものである。

(二)基督教は切より一の「社會」——教會として、世に出現した。一の宗教思想として、世に紹介せられたのでない。人が初めて基督教に接した時、基督教は教會の中にあつた。畢竟、これは初よりイエスキリストの思召であつたからである。

イエス、キリストは其宗教を書物の上に立てんとせず、生ける人格の上に建てんとしたまふた。

これが爲に其の宣教師生涯の當初に於て、先づ十二人の弟子を選び、これを使徒として、三年間起臥を共にし、或は教説により、戒は其業により、又最も多く其人格によりて、彼らを教養して、將來、世に出現すべき「教會」の萌芽とならしめたまふた。

かくて其世を去らんとしたまふに當り、彼らの爲に將來の設備として、聖靈を與へ、教會統治に關する權威——罪を赦し、罪を留むる權威を授けたまふた。

(43)

又世の終まで彼らとともに在すとの約束を與へたまふた。又一般に救の爲に必要なりとして、二の聖餐を立てたまふた。一は父と子と聖靈の御名によりて施さるべきバプテスマである。他は『我記念の爲に行へ』と命じたまひし十字架の上に於ける天下萬民の爲の罪の贖の記念の祭たる聖餐である。此二つの聖餐は將來形成せらるべき教會に於て「恩恵をうくる法」として行はるべきものであつた。

(註)。キリストによりて直接に立てられし一般に救に必要な此二の聖餐の外に、聖靈の指導の下に、使

徒たちによりて實行せられし他の聖奠もある。信徒按手、結婚式、聖職按手式、懺悔式、抹油式である。

稻垣陽一郎著「さくらめんと」(六三—七三頁)第三章五参照。

以上は教會建立に關するイエス、キリストの思召と其保障を與へたまひしことを示すものである。やがて「聖靈、なんぢらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん」との約束の聖靈たる「イエスの御靈」は、五旬節に降臨した。使徒たちはこれにより力を得て、イエス、キリストの死と復活を説き、信仰と悔改とによりて罪の赦を受くべきことを告げ、其結果、改宗して、洗禮を受くる者、多數生じ此に教會は事實として出現した。

此教會にキリストの教は保存せられ、キリストの立てたまひし聖奠は行はれ、キリストの命じたまひし道徳が實踐せらるることとなつた。

かくの如く教會は初より一の社會であつた。神立の社會であつた。人は神より此に招き入れられるのである。教會とは人が便宜上、團結して作りし宗教的修養の爲の會合でもなく、若くは社會改善の機關でもない。教會はあくまでもキリストによりて來れる「めぐみのホーム」である。

基督教生活は此「めぐみのホーム」たる教會と絶えず接觸を保ち、此に設備せらるる超自然的恩寵を受けつゝ送る信仰生活である。

かくて教會——使徒たちよりの聖公會は、「めぐみのホーム」として世に立て居る。人間の靈魂の救に必要なる神の恩寵の設備は此にのみ存する。従て救を受けんとするには教會に來るの外ない。此意味に於て昔も今も今後も「教會以外に救なし」。

(註)。神は全能にして全愛にています。故に若し必要あらば如何なる方法によりても、人を救に入れ得たまふに相違ない。されど通常、人が救を受くる道は教會にのみ設備せられて居る。

(三)一旦教會成りてのちは、教會は恩寵の施設所——「めぐみのホーム」として世に其職能を發揮して居る。之は主として聖奠によつてである。

「聖奠は我らに賜ふ靈なる恩惠の徴證なり。キリスト自ら之を建て、此恩惠をうくる方法として又この恩惠を賜ふ證となし給へり」聖奠には、「目に見ゆる外の徴證」と「靈なる内の恩惠」がある。何故に神は此種の方法を採りたまふのであるか。

これは神の深き思召のある所にて、神がめぐみを與へたまふによりて、われら人間にとりて最も善き方法であるからである。

元來、聖奠の原則は二のことを前以て假定して居る。一は人間は靈魂と身體との二重性の存在であること、他は従て神は其目に見えざるめぐみを人に賜ふに當りて、目に見ゆる或事物を用ひたま

ふとのことである。

故に若し人間は唯、靈魂のみ存在であるならば、此種の聖奠の必要はないであらう。此場合、神は其の靈の恩寵を直接人間に與へたまふことなるからである。然るに人間は現に精神的活動の機具として身體を必要とし、又思想發表の爲に、言語、文章、舉動等を用ふるとせば、神が人に靈の恩寵を賜ふるに當りて、或事物を仲介として用ひたまふとも、決して怪むに足らぬ。却てそれは當を得たものなりと察せられる。

加之、此種の方法によりて、神のめぐみの人間に與へらるる場合、これを受くる者にとりては、最も適確にこれを體得することができてからである。即ち何時、何處で、如何にして、神の特殊のめぐみに與かりたるかを知り得るからである。

基督教の依りて以て立つ神の御子が肉體をとりて世に來りたまひしことも、畢竟、此原則を是認せるものにして、教會の聖奠制度は、此インカーネーションの延長にして、又其應用に過ぎない。

されば教會の聖奠組織は、人間自然の要求に應ずるものにして、其合理性と必要性は、過去二千年間の無数のくりすちやんによりて證明せられて居る。基督教は勿論、最高の意味に於て靈的の宗教なれども、此意味に於て、又聖奠的宗教である。

然るに世には、聖奠は一種の機械主義なるかの如くに非難し、物質を用ひて、靈のめぐみが招來せらるるなどとは、一種の魔術の類であると冷罵するものもある。

決して然うではない。聖奠は器械主義でもなければ、魔術でもない。使用せらるる物質は、勿論靈的功力を生ぜしめ得ない。されどこれには聖靈の作用が伴ふて居る。聖靈がこれを用ひて、神のめぐみを入にもたらしたまふのである。

加之、聖奠にはこれをうくるものの信仰が期待せられて居る。信仰のなき所には、神のめぐみが作用せられやう筈がない。

(註)。稻垣陽一郎著「まくらめんと」二五五頁参照

要するに我らの主イエス、キリスト——十字架の上に萬民の贖の爲に死に、死にて甦り、甦りて天に昇り、天に昇りて後は、其「他の助主」たる聖靈によりて教會のうちに、又信徒の心に作用したまふ主は、めぐみ——神より超自然的の助と力の本源にいます。此活ける救主——助主より、我らは信仰生活と共に伴ふ道德生活に必要な助と力とを與へらる。

新約聖書の後半に見る使徒書は、キリストの使徒たちの書翰である。これらは信仰生活上、最も尊き文献である。其書中には人生のあらゆる遭逢の間に、活ける助主たるキリストより受けし超自然的

のめぐみの體驗がのせられてある。或は『主、我と偕に在して、我を強めたまへり』(テモテ後四ノ十七)。或は『主、いひたまふ』我めぐみなんちに足れり、わが能力は弱きうちに全ふせらるればなり。』：この故に我はキリストの爲に、微弱、耻辱、艱難、迫害、苦難に遭ふことを喜ぶ。そは我、弱き時につよければなり』(コリント後十二ノ九—十)。或は『我は卑賤に居る道を知り、富に居る道を知る。また飽くことにも、飢ふることに、富むことに、乏きことに、一切の秘訣を得たり。我を強くしたまふ者によりて、凡ての事を得し得るなり』(ピリピ四ノ十二)といふが如きは、皆其例である。

これらの體驗は、曾て基督教會と、基督信徒の大迫害者たりしが、一旦活けるキリストに接して回心せし、キリストの福音の大使徒となりし聖徒パウロの證言するところである。これは一種の基督教神秘主義といへよう。されど程度こそ異れ、これらの體驗は、苟もクリスチアンとして正き信仰生活を送るものならんには、何人にも経験するところのことである。此に基督教道徳實踐力の秘訣は存する。

かくて此のめぐみ——超自然的の祐助と能力とによりて、よわき我らも、誘惑に勝ち、罪を制し、徐々ながら神の我らに求めたまふ聖潔に進むのである。

かくて此「めぐみ」——超自然的の祐助と能力とによりて、我らの性格も、次第に圓熟し、美はしき

基督教的諸徳を發揮し得るに至る。

めぐみの實證、此に在る。所詮、基督教はめぐみの宗教である。

結 語

基督教は決して之を信奉する人の生活を窮屈にする宗教でない。基督教信仰生活は、決して之を送らんとする者に不可能の事を要求するものでない。眞の自由は、神のめぐみ——活ける主よりの祐助と能力とを賜はりて、神の御旨を我生活に實行せんとする所にある。かくて眞の自由とは、眞の自己の存在を實現することである。我らが正に在らねばならぬ如くに在ることである。聖書に我らの靈魂を救ふとあるは、即ちこのことである。自恣亂行、おのれ慾望のまゝに行動することは、自由に似て、其實決して自由でない。此種の人こそ却て憐れむべき自己慾望の奴隷に過ぎない。自己の欲望に超越し得ず自己の行動を統制し得ない此種の人々が、多ければ多きほど、社會は更新せらるることは愚か、却て社會道義は頽廢する。基督教信仰と道徳とは正に此種の頽廢傾向に對する「鹽」である。

基督教會の此世に存在する理由は、實に此種の信仰と道徳とを涵養し、一人にても多く神を敬ひて足ることを知り、正直にして、虚偽を排し、心身ともに貞潔にして、神を愛し、人を愛する者をつく

露光量違いの為重複撮影

り、これを教養せんとするにある。

昭和九年一月二十三日印刷
昭和九年一月二十五日發行

〔定價金貳拾五錢〕

著者	東京市豊島區通三丁目一六一二
著者	東京市豊島區通三丁目一六一二(附地方)
發行者	白石庵 敬神書院發行所 東京市豊島區六國三區
印刷人	東京市豊島區西區橋本丁日一二六
印刷所	東京市豊島區西區橋本丁日一二六 學園印刷所
取次販賣所	東京市豊島區村木町二四 聚公會出版社 電話東京四一七〇〇番

露光量違いの為重複撮影

り、これを致齋せんとするにある。

昭和九年一月二十三日印刷
昭和九年一月二十五日發行

【定價金貳拾五錢】

著者

東京市豊島區池袋三丁目一六一二
稻垣陽一郎

發行者

東京市豊島區池袋三丁目一六一二(稻垣方)
白石庵敬神叢書發行所
振替東京四六四三五

印刷人

東京市豊島區西巢鴨四丁目一二六
澤田文雄

印刷所

東京市豊島區西巢鴨四丁目一二六
學園印刷所

取次販賣所

東京市麻布區材木町二四
聖公會出版社
振替東京四一七四〇番

終